令和５年度秋田県立図書館協議会　要旨

１　開催日時：令和５年１０月２４日（火）　午後１時３０分～午後３時

２　会　　場：秋田県立図書館　多目的ホール（３Ｆ）

３　出 席 者：会　長　高橋　秀晴
委　員　朝野　明子
〃　工藤　正孝
〃　小林　光代
〃　佐々木光雄
〃　佐藤　博司
〃　下タ村公子
〃　鈴木　竜典
〃　土崎　真紀
〃　渡邉　順子
事務局　中田　善英　秋田県教育庁生涯学習課課長
貝田　晴絵　〃　社会教育・読書推進チーム副主幹
菅原　敏紀　秋田県立図書館館長
成田　亮子　〃　主任図書専門員(兼)情報班長
芳賀奈央子　〃　副主幹(兼)企画・広報班長
小山田　希　〃　副主幹(兼)図書資料班長
福田　真悦　〃　主査(兼)サービス班長
柿崎　幸　〃　副主幹(兼)総務班長

４　議事概要
（１）開会
（２）委員紹介
（３）事務局紹介
（４）生涯学習課長あいさつ
（５）図書館長あいさつ
（６）報告
■表記について（●：委員、→事務局）

<u>令和５年度秋田県立図書館の活動状況について</u>（菅原館長及び各班長から説明）

●統合が予定されている十和田高校を訪問したとのことだが、どのような相談があったか。

→統合先の花輪高校への図書の移転にあたり、スペースも限られている中、どの本を移すべきか、また、残った本のリサイクルなどに関する内容であった。

●７月の豪雨災害を受け、「災害・防災ミニ展示」を実施したとのことだが、時事に即時に対応した展示の機動力は素晴らしいと思った。リアルタイムな展示により得られた情報は利用者にとっても貴重だったと思う。

●統合する学校サイドから、私たちも身近な市内の公共図書館として相談を受けることがある。できれば県立図書館のアドバイス内容を共有することで、両者で齟齬がないように進めていきたい。
　また、様々な取組については、その結果についても教えていただきたい。例えば、デジタルア

ーカイブへのアクセス数や取組の中で減少が見られたもの、成果があったものについての要因や、現在の雑誌スポンサー数や寄贈雑誌数などについても、もう少し詳しく教えていただきたい。

●「災害・防災ミニ展示」は、短期間ではあったが、県民にとっては有り難い情報だったと思う。展示開始にあたり、事前にメディアへのプレスリリースは行ったのか、お聞きしたい。展示の内容を認知する機会が「来館」だけではなく、新聞やテレビなどのメディアを通じて情報を得ることができれば、来館しようとする県民がより増えると思う。

→「災害・防災ミニ展示」については、準備期間が短かったため、広報は当館の Facebook のみであった。御意見を踏まえ、今後はメディアを活用した広報に取り組んでまいりたい。

●今年度、「休館日を活用した図書館見学」として、もりやまこども園大川分園の園児を受け入れていただいた。参加した園児たちはとても喜んでおり、それを聞いた保護者も同じように喜び、各家庭内でも子どもを図書館に連れて行きたいと話している。子どもたちに図書館という存在を根付かせるよい取組だと思っており、可能な範囲でこの取組を広めていただきたい。

●10 月に始まったサピエ図書館の利用状況について伺いたい。チラシには、視力に障がいがあり本を持つことが出来ない方など読書が困難な方のためとあるが、それ以外、例えば読書が困難な方の御家族や、仕事などで関心がある方でも利用できるものか。

→10 月から始めたばかりのため、まだ実際のところ利用者はいない。視覚障がいのある方が利用できる図書館として皆さんがイメージするのは、秋田市土崎にある秋田県点字図書館だと思う。点字図書館の利用対象者は視覚に障がいがある方でかつ、障害者手帳を持っている方に限定されている。一方、サピエ図書館は、文章の理解が苦手な人や、視覚以外の障がいのため、本を持つことが困難な方などにも対象を広げてサービスを提供しようというものである。

これまでも平成 21 年の著作権法の改正に伴い、各図書館でも対象を広げた取組を進めてきたところであるが、現在、当館では、サピエ図書館の利用は、「活字による読書に困難を感じている方」に対するサービスとして位置付け、知的障がい、発達障がい、学習障がいの方などにも対象を広げて取組を進め、紹介を行っている。ただ、残念ながら委員の質問にあった御家族の方、仕事などで関心がある方はサービスの対象からは外れてしまう。

しかし、現行の対象範囲であっても、利用できる県民の方は数多くいると思っており、本サービスの周知に向け、積極的に情報提供してまいりたい。

●学校図書館へのセット貸出、特別貸出について、どちらも前年度より減少しているが、利用した学校へのアンケートは実施しているものか。アンケートに寄せられた意見、そこから見える要因等があれば教えていただきたい。

また、「休館日を活用した図書館見学」は、障がいのある子どもたちにとって非常によい機会であると感じており、今後活用する学校が増えて欲しいと思っている。こうした取組を特別支援学校の職員に伝えるような取組も併せてお願いしたい。

→学校図書館へのセット貸出については、セット毎にアンケート用紙を入れている。アンケート項目は、生徒の利用状況と今後のセット資料内容への要望等である。

なお、減少理由はまだ明確に分析できていないが、新型コロナウイルス感染症に伴う学級閉鎖が多かったことも一因と考えている。また、学校司書が配置されている学校では積極的な活用が見られる一方、それ以外の学校での利用拡大が今後の課題でもあり、様々な機会を捉えて、広報してまいりたい。

→少し補足したい。セット貸出の微減傾向は、生徒の１人１台端末利用の影響の現れと感じている。中には、秋田高校のように探究活動のため文献にあたりたい、本の貸出しをお願いしたい、という学校もあるが、１人１台端末で全て事足りると考える学校も多い。しかし、ただ手をこま

ねいている訳にもゆかず、ＰＴＡ連合会の交流会や校長会など、あらゆる機会を生かして、セット貸出や「休館日を活用した図書館見学」について一層、ＰＲしてまいりたい。

●数字に関して言えば、県人口や学校数、生徒数が減少する中での「現状維持」は十分頑張っていると評価できるのではないか。関係機関や県民にも、昨年度並みということは、努力がなければ維持できないものだ、と話してもよいと思う。

●障がい者の見学について、本図書館では見学の他、職場体験も受け入れている。カウンターにも出ていただくが、そのことで、利用者の優しさが垣間見られるなど周りの空気もとてもよくなる。体験する側だけでなく、受け入れる側も学びになることが多くある。
　また、見学の際に、こちらでは大丈夫だと思っていた場所が、実は車椅子で通れないなど、当事者から教わることが多くあり、こうした機会をもつことの大切さを実感している。
　なお、数字の減少は、調べ物や資料閲覧のためのツールが他にも沢山あり、入館者数や貸出数だけが、図書や図書館への親しみを測る指数ではないと思っている。あまり数字に振り回されないよう、図書館として毅然とした態度をもっていてもよいのではないかと思う。
　サピエ図書館については、県立図書館でのサービス開始を嬉しく思っている。サピエ図書館のほかに、伊藤忠記念財団が提供しているわいわい文庫は健常の方も使えるものがあるので、参考までにお伝えしておきたい。

→職場体験についてである。実は、今年度、特別支援学校から図書館でのインターンの受入について申し出があった。当館としても前向きに検討していたが、急遽、生徒の来館が難しくなり、中止したケースがある。しかし、こうしたプラスαの波及が出ていることも御紹介したい。

●市町村図書館や学校図書館への支援を熱心に行っていると感じた。しかし、図書館だよりに掲載されているアンケート結果を見れば、半数以上の方がそうした支援を知らないと回答している。何かもっと広報する手段はないものか。

→このアンケートは、図書館の来館者を対象に実施したものであり、学校図書館への支援など、図書館の仕事の裏側については認知度が低くなっている。
　また、先ほど委員から質問があった雑誌スポンサーは、７月末現在で 25 社が 29 誌について協力している。今年度に入り、昨今の物価高などの影響で辞退を申し出る企業が出てきている。

（７）協議

<u>秋田県立図書館への要望・提言等について</u>

●先程、委員から発言があった「広報」や「周知」に関し、来館者には見えにくい図書館の仕事を知ってもらう手立てなどについて意見をいただきたい。

●本図書館では日常的に報道機関に投げ込みを行っている。取り上げられるかどうかは別として、全社に同時に配信する。また、絶対に取り上げてもらいたいと思うものは、画像を貼付する、見出しを工夫する等している。

●メディアの利用については他の委員の皆さんからも意見があったが、投げ込みだけだとスルーされてしまう可能性が高い。一方、担当者に直接当たると全く感触が異なるという場合もある。館長もトップセールスで各新聞社と情報交換される機会をおもちであるが、それをさらに広げていくのもひとつの有効策だと思う。貴館には、ニュースバリューのある取組も多くあり、報道機関への働き掛けは地道ながらも効果が高いはずだ。

●私たち協議会委員にもメールなどで情報が共有されるようになるとよい。各委員はそれぞれのフィールドでネットワークをもっており、そのネットワークを活用することで、さらなる情報の広がりが期待できる。人口減少の中においては、今後益々、情報を共有するということの価値がより際立っていくと思う。

●我々委員も意見を述べるだけではなくアンバサダーとして動いた方がよいという意見である。
　この協議会を１年に２回集まるものと捉えるだけでなく、日常的に各種イベントや展示企画などの情報提供を受け、それを各委員のネットワークで広げていくという手法は有効だと思う。人的ネットワークを活用すれば、倍々で広がっていく可能性もある。

●貴館が日頃積極的に活動しているのは承知しているが、広報があまりされていないように感じている。もう少しメディアにプッシュし、地元新聞等に掲載してもらうようにしてはどうか。

→貴重なアドバイスをいただきありがたい。プレスリリースについては県全体の投げ込み制度を活用しており、時には繋がりのある記者に直接情報提供しているが、なかなか取り上げてもらえず苦労しているところである。本日の各委員からの意見を参考に、より努力していきたい。
　また、最近はＳＮＳを活用した広報がメインになってきているかと思うが、当館において活用しているＳＮＳはFacebookのみである。より効果的なツールがあれば意見をいただきたい。

●どの組織でも同様だが、いかに宣伝するかということは大きな課題の一つである。最近、秋田市立新屋図書館の取組紹介や、本協議会委員が出演している番組をテレビで拝見したところだが、当県は高齢者率が高いこともあり、テレビで情報を得る方も多いのではなかろうか。貴館の利用者層を考慮すれば、テレビでの情報発信も新聞以上に有益な手段になるのではないかと感じる。
　また、若年層への情報発信という点で２点、意見を述べる。１点目は、高校生や大学生向けについてである。高校生や大学生は、FacebookよりもInstagramで情報を得ている。今後はそのようなツールも活用し、各種取組を紹介するのがよいのではないか。２点目は、未就学児や小中学生向けについてである。中学生以下にも情報が届くためには、貴館の近隣の学校へのアピールが重要だと思う。貴館の利用者には、近隣に住む子どもたちや保護者が多いはずで、各種取組の紹介や校外学習への対応などを広くお知らせすることで、学びの場として活用していただけるのではないか。小学校の校外学習でスーパーなどに行くが、「絶対にまた家族と一緒に行く」と言う子どもも多い。そのような子どもたちの力を利用するという視点からも、近隣の学校へのアピールが重要である。

●貴館のサービス提供対象は全県だが、まず足下を固めるということは大事である。それによって貴館が手がかりを得られるということもあるだろう。

●貴館の事業紹介により、近隣の子どもたちは自転車を漕いでやって来るのではないか。そのような姿が貴館でも見られるとよい。

●広報の多様性についても指摘されていたが、働き掛ける層によって有効なメディアは異なる。私が大学生の頃は新聞を購読しないということは有り得なかったが、最近は新聞を自分で購読している大学生はほとんどいない。状況は今後も変わっていく。どの層に伝えたい情報なのかを見定めたうえで宣伝のツールを選択する、という細やかさも必要になってくる。

●先日、本園の子どもたちが貴館を利用した際は、午前中に貴館で読み聞かせなどを体験し、午後は秋田県児童会館で昼食を摂った後、思い切り遊ぶという日程を組んだ。当日は、子どもたちも先生方も「やり切った」という気持ちが強くあったようだ。園内では毎年行きたい、と思うくらい好評で、秋田県児童会館と連携した子ども向けプランの提案なども是非、御検討いただきたい。
　なお、質問であるが、各市町村の広報誌に県立図書館の情報が掲載されるような仕組みはある

ものか。市町村立図書館の多くは貴館に力を借りている。各市町村立図書館の協力も得て、各市町村広報誌への掲載に繋げていくという方法もあるのではないか。

●県立図書館は行政組織上、立場が他図書館と異なると認識している。全県の図書館をまとめる機能をもった図書館ではなかったか。

→秋田県内の全図書館・図書室が加入している秋田県図書館協会という組織があるが、その協会の会長は当館が務めている。

●市町村立図書館の情報が県立図書館でも得られ、県立図書館の情報が市町村立図書館でも得られる双方向性の仕組みはあるのか。

●市町村立図書館は、各市町村の教育委員会が所管している。その枠組みの中で、秋田県図書館協会という組織を介して、秋田県内の図書館・図書室が連携し、相互貸借事業等を行っているところである。

→会長のお話は、図書館法に定められた「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」に示されている「都道府県立図書館は域内の市町村立図書館を支援し、ネットワークの構築に努める」ということを指していると感じた。なお、各図書館には自主性が担保されており、都道府県立図書館が介入し、指導が行える立場にあるかと言えば、そこまでの権限はないものと承知している。

→行政組織上の上下関係が明確にあるわけではなく、同じく図書館を運営する仲間として日常的に様々なやり取りがある。広報についても、市町村立図書館で行っている事業の周知に当館が協力し、また、当館が行う事業の広報について、秋田市内をはじめとする近隣図書館にポスターの掲示やチラシ配布などの面で協力いただくなどしている。これまでも相互の協力があるが、会長のお話にあった「互いの情報の共有と各々のツールを生かした情報発信」という点については今後柔軟に考えていく必要がある。

●今までも日常的な協力はあるものの、一層の連携に向けた工夫の余地はある、ということで理解した。

●本図書館では、県立図書館に相談にのってもらう、相互貸借事業を利用した本の貸出を受けるなど、仲間として密に協力いただき、丁寧な支援で感謝している。ただ、互いが目指す大きな方向性は同じであるものの、各市町村ごとに独自で読書推進計画を策定するなど、その趣は少しずつ異なる。地域の特性を生かした事業を各々が実施している点は御承知おきいただきたい。

●本協議会の委員にテレビメディアの方に入っていただくのはいかがか。事業実施前の広報は重要であり、そのような繋がりがもてるとよいのではないか。

●現実的な提案として受け止めていただきたい。検討の余地がある。

●私は退職後、県立図書館のボランティアとして活動している。ここ数年、書架がとてもよく整理されており、ボランティアのメンバーともよくその話をしている。図書の整頓や借りやすさの面で非常によく頑張っていると感じている。
　ただ、最近の新聞や図書は西暦表示のみで和暦が併記されていないことが多い。私の周りの人からは、「西暦表示のみでは分かりづらく困る」という声をよく聞く。そのような小さなことから活字離れが始まると思う。貴館においても、様々な世代に配慮した表示などを心がけてもらえるとよい。

●元号法により、行政機関では和暦を使用しているが、民間企業では西暦表記のみとしていると

ころも多い。それは、昭和の期間が長かったことに比べて、平成の期間が短かったこと、外国人には和暦が分かりづらい等の理由が挙げられる。ただ、公的機関は様々な世代や立場の人に配慮した仕組みを作るべきということは、大事な問題提起だと思う。

●委員がおっしゃる通り、併記表示に対するニーズがあるということは知っておいていただきたい。利用者からの要望に完璧に応えられなくても、工夫の余地がないか検討していただきたい。

●学校図書館へのセット貸出数が減少しているという話があったが、学校に勤務しているとタブレットで全て済ませてしまう生徒が年々増えてきているということを非常に強く感じる。インターネットで得られる情報の中には信用できるもの、信用できないものがあり、それを判断できるようにならなければいけない。インターネットで得られた情報を本で確認する、という新しい利用の方法をこちらから提案していく必要があると感じている。
　また、自分が子育てをしてきた経験から、子どもが図書館で本を借りる際に、親としては返却するのが大変、という面がある。学校でもセット貸出の図書を見ている生徒はいるが、返却するのが面倒だからという理由で借りていかない生徒も多い。貴館は貸出の利便性向上に力を入れているが、返却の利便性向上にも目を向けるべきではないか。例えば駅で返却できるようにするというような方法もあるのではないか。返却のしやすさが、貸出に結び付くと思う。

●返却のしやすさを重視すべきという新しい視点だったがどうか。

→返却方法の拡充については、当館としても課題だと認識している。現在も市町村立図書館に返却し、当館で定期的に回収するということは行っている。日々カウンターに立っていると、一日数回は「市外から来たが図書を借りられるか」という質問を受ける。その際には、お住まいの地元の図書館でも返却可能であることを案内しているが、このような問合せを直に行う方は少数で、実は、遠方に居住していることで利用を躊躇する県民が多くいるのではないかと思っている。秋田市から遠方の居住地でも地元の都図書館を経由して返却や貸出を受けることが可能であることをもっと多くの県民に知ってもらえるような広報の在り方を考えたい。
　なお、秋田市内では秋田駅近くのあきた文学資料館への返却も可能である。

●市町村立図書館のみならず、秋田県立大学でも県立図書館の本を大学図書館経由で借りることができる。これらはだいぶ前から行っている取組だが、浸透しているのか。

→市町村立図書館経由の貸出・返却については大分浸透しているように思う。大学は学生の入れ替わりがあるため、各大学図書館で工夫して周知してもらっているところである。

●今回は広報について集中的に議論した。ひとつのテーマを深掘りてきてよかったのではないか。県立図書館で内容を精査し、対応可能な点については検討してほしい。
　先ほどタブレット端末やインターネットに関する意見があったが、インターネットや生成ＡＩは決して悪いものではなく、今後はむしろ、それらなしで生活することは考えにくい。しかし、これまでの委員の発言にもあったとおり、危うい面も多い。ディープラーニング（コンピューターが自動的に大量のデータを学習していく技術）等の機能が向上すればするほど生成ＡＩが生成した情報が大量に出回り、誤情報や偽情報などのデジタル情報空間での汚染が進むことで、何が正しい情報なのかが一層不透明になっていく。その時にこそ、人の手により何段階ものチェックを経た書籍や紙媒体の価値、また、それらにより得られる情報の純度が改めて問われることになる。そのようなことも含め、図書館の重要性はさらに増していくのであろう。
　また、館長が取材を受けた記事中に、「人と人とを繋ぐ」ということについて言及があった。本日の貴館からの説明や各委員からの意見には、人と人との繋がりに関するものが多々聞かれた。人と人との繋がりをいかに育んでいけるかが、今後、図書館の取組のひとつのキーワードになるのではないかと感じた。

（８）開会